

佐高信  
経済評論家

『夕刊フジ』の連載コラム「俺ひとり」を愛読している。筆者は作家の白川道で、二月一日付けのその見出しは「不愉快な番組」である。

そこで白川は、久米宏が司会の「テレビってヤツは」を取り上げ、なぜ、ホリエモンを出演させるのかと問っている。

「刑事被告人である彼が有罪か無罪かは知らぬ。だが公共の電波を使つての一方的な彼の弁舌、弁解などは聞きたくはない。だいいち、公平性に欠けるだろう。もし彼にそれを許すなら、すくなくとも彼とは反対の立場にいる

補した堀江が何と戦つたのか、私は最後までわからなかった。戦っている気分になつてゐることはわかるが、民主党でも自民党でもよかつた堀江が権力と戦つたとは、とても思えない。堀江の選挙には、時の自民党幹事長・武部某も応援に駆けつけたし、時の大臣の竹中平蔵も駆けつけたのである。

大下英治は「ドキュメント堀江貴文」が副題の『逆襲』（竹書房）に、その時の様子をこう記す。

「坂本龍馬や伊藤博文も、二〇〜三〇代で日本を動かした。やるからには総理を目指す」

## ホリエモンの一方的な弁解を垂れ流すTV番組 功罪の検証など二の次で関心は視聴率向上のみ

人間も出演させるべきだろう。出させるほうも出させるほうだが、出るほうも出るほうだ。彼がこの手の番組に出演してオチャラけるのは、すべてが落着いた後のことだとおもつ。結局は、一度は引退、もしくは休養宣言をした大物司会者と、彼とは目立ちたがり屋という点で共通の本性を持った人物とを配しての視聴率を狙つた番組構成ということなのだろう。下心が透けて見えて不愉快この上ない」

三月一〇日に出たホリエモンこと堀江貴文の『徹底抗戦』（集英社）がベストセラーとなつたが、自民党の推薦を受けて衆院選に立候

と大きく出た堀江は、「人気だけじゃないか」という批判には不満で、

「劇場型選挙が悪い？ ぼくの立候補で、多くの心が政治に興味を持った」と居直つた。

武部の応援演説はこうである。「彼の姿を見て、いままでとちがう日本が始まるという感じを受けた。堀江君はわが弟であり、息子だ」

そして、竹中も次のように持ち上げた。「彼はビジネスで成功しているのに、わざわざリスクをとって、国のために戦おうとして

いる。小泉首相とホリエモンと私が、改革のスクラムを組む」

この時、竹中は郵政民営化の担当大臣だった。つまり、小泉「改革」のシンボルだったのである。

しかし、いま、その「改革」が「改革」の名に値しないものだったことが明確になつてゐる。

拙著『小泉純一郎と竹中平蔵の罪』（毎日新聞社）は発売一カ月で五刷となり、二万部を超えたが、特に地方の書店からの引きが強いという。小泉が自民党の支持層を地方の保守から都市浮動票に移したことを敏感に察知したからだろう。郵政民営化ならぬ郵政「会社化」は結局、「かんぼの宿」の問題で明らかになつたように郵政「私物化」だったことが天下周知の事実となつた。

そのお先棒をかついだのが竹中であり、ホリエモンだったわけである。地方の過疎化を進めてしまったそれを反省するどころか、竹中などは「改革」が不徹底だとか、「改革」が止まってしまったなどと喚んでいる。

どこまでも恥知らずな奴だとしか言いがたないが、『徹底抗戦』で堀江は、ニッポン放送株買収の資金がリーマン・ブラザーズだったことを明かしている。

今度の世界金融危機は、俗にリーマン・ショックといふこの会社の倒産によって惹き起こされた。そつたことに目を向けず、マスコミはただただ、視聴率を上げることだけを目標している。